

## 2月1日のウクライナ情報

安齋育郎

### ●全面核戦争へ秒読み開始—スコット・リッター「私が間違っていると、どうぞ証明してください」(2023年1月25日)

※安齋注:これはあるフォーラムでのスコット・リッターの発言の一部です。私よりもはるかに深刻な問題意識で、「今年は地球最後の年」のような認識ですが、この物知りの言い分を聞いてみて下さい。この戦争でロシアが敗北することは「絶体に許されません」という言い方は、安齋流では、「ロシアはこの戦争に勝たざるを得ないのです」と同じです。

このフォーラムに招いてくれてありがとうございます。私はダイアンの合唱団が演奏する『レクイエム』を聴いて、胸を打たれました。私は、ダイアンのようなクラシック音楽愛好家ではありません。私は労働者階級の家で育ち、労働者階級的な音楽環境の下で育ちました。しかし、現在、私たちが直面している核戦争の危機を端的に表現していると思う音楽を私はここで紹介できます。Johnny Cashの“The man comes around”という曲です。実際に死の床から歌ったような凄みがあります。そのイントロの歌詞を紹介します。

四匹の獣に囲まれ、私は一つの声を聞いた。

私は目を凝らして、それを見つめた。私がそこに見たものは一頭の蒼ざめた馬であった。

それに跨る者の名を「死」という。

地獄が彼の後に付き従う。(TSSP 訳)

まさにこれこそが、私たちが今いる世界です。私たちはここで遠い未来を話しているのではありません。ここから見える直近の未来図は地獄のような地上の有様です。こうして私たちが話している間にも「死」が蒼ざめた馬にまたがっているのです。

もし、あなたがまだその事に気づかないのなら、あなたはそのまま喜び勇んでその深淵へと向かうのです。ヘルガが話したアルマゲドン、水爆核戦争の深淵へと向かうのです。私たちは今、文字通り水爆核戦争の瀬戸際にいます。

人々が現在の危機をキューバ危機になぞらえるのを私は何度も聞きました。ここでキューバ危機について少し語らせてください。

その当時、私はまだ赤ん坊だったので直接的にそれを経験したわけではありません。

ウィリアム・ポーク(歴史家、中東学者、外交官)は私の良き友人でした。

彼は、キューバ危機の最中、文字通りケネディの隣にいてアドバイスしていた人物です。彼はミサイル危機を避ける方法を知っていました。それは外交でした。外交という名の非常に伝統的なやり方でした。

アメリカ人はロシア人と話し合い、ロシア人はアメリカ人と話し合うというごく当たり前のやり方でした。表立って交渉することが政治的に困難な時でさえ、陰でちゃんとバック・チャンネルが用意されていました。

それが成功したことを、アメリカ合衆国大統領 J.F.K とソビエト共産党書記長フルシチョフの二人が現実の歴史の中で証明しました。ところが現在の私たちは話し合いをしません。

確かに、情報局がアンカラなどで TED's meeting を開催したり、世界中でいろいろな会議を催したりしますが、どれも交渉とは程遠いものです。私たちはただでさえ極度に緊張した状況にあるのに、その緊張を緩和する基本的メカニズムを失っているのです。

今日の世界には、米露間の緊張を緩和するための外交的交流がどこにもありません。つまり現在の核戦争危機は、キューバ危機の時よりもずっと深刻なのです。そして、人々がその事実を自覚していない事が危機をいっそう深刻なものにしています。

今日、私は中米ロシア大使アナトリー・アントノフと昼食を取る機会を得ました。彼は現在の状況を大変嘆いていました。あなた方は私がロシア人と一緒に昼食をとったことを非難しますか？私は全く気にしません。

彼こそはバラク・オバマ政権時代に交渉の席にいて、新 START(New Strategic Arms Reduction Treaty)条約を成立させた人物です。米露間で今日唯一存在する武器削減条約を成立させた人物です。彼こそがロシア側の代表でした。

つまり、彼に匹敵する偉大な業績を成し遂げた人物は今のワシントンのどこを探してもいません。誰一人としてアナトリー・アントノフが成し遂げた業績の足元にも及びません。その彼を現在のアメリカは「金の鳥籠」に閉じ込めているという有様です。

アメリカでは誰も彼と会話することが許されません。誰も彼と交流しようとしません。ですから彼はアメリカで完全に孤絶状態にあります。今日、彼はアメリカ国務省高官について話をしました。というのも、今日は偶然、INF(中距離核戦力全廃条約)調印 35 周年記念日だったからです。

そして、私自身も INF 履行に際し、重要な役割を果たすことができました。あれは 1987 年 12 月に調印され、1988 年 7 月から実施されました。その調印と実施に関係し尽力した OB・OG の集まりが実はアメリカにもあります。

その中にアメリカ合衆国国務省の高官もいますが、オフレコを条件にされているので私はその人の名前をここで明かすことができません。しかし、彼が語ったことをここで引用することはできるでしょう。

今日、彼は私に「現在のアメリカ合衆国国務省内で、アメリカの核兵器政策について何も話すことができない。まったく金輪際、何も話すことができない」と嘆いたのです。核兵器関連の事、核関連企業の事は何をしてもアメリカ合衆国国務省が、最優勢です。

ところが、全廃条約交渉を含む核関連事業の全てにおいて責任を持つそのアメリカ合衆国国務省内でそれを話題にできないのです。私になぜここでこの話を持ち出したかと言うと、アントノフ氏によると、「非常に悲しいことに、今日、二国間の真空を埋めるものが何一つ存在しない」からです。

今日では、交渉経験・能力をロシア側から期待することさえできません。なぜなら、交渉の経験・能力は日頃から常に磨いていないと、退化してなくなってしまう性質のものだからです。長い間、放置されていたためにロシア側の交渉係の能力もアメリカ同様に退化して消えてしまいました。

つまり世界最大の核保有国がここに二つあります。核兵器を管理しやがて全廃を達成するよう期待されている同じ人々の現実が、核兵器を国家安全保障の道具としてもっと使いやすくするように最新アップデートするのに日々忙しいという有様です。紳士淑女の皆さん、これは文字通りの狂気です。

これは狂気の定義にぴったりと当てはまるものです。これほどまでに「地球的規模の自殺」にピットリ来る例を、私は他に思い浮かべることができません。誰一人として核兵器全廃を語らない。全廃を語る代わりに全ての人々が核兵器開発競争について熱っぽく語っています。

核兵器について率直に言えば、実はロシアはもうアメリカのずっと先に行っています。アメリカの 22 倍は先に行っています。ロシアには新しいミサイルがあります。新しいミサイル・システムがあります。私たちのシステムは彼らの足元にも及びません。

それについて誰かが私たちの素晴らしいアメリカ上院議員たちにプロとしてのヒントを見せてほし

いです。ダイアナ、私は今すぐあなたに上院議員の一人になってもらい、彼らの耳に「正常さ」を囁いてほしいのです。今いる上院議員たちはどうでしょうか？

ただ一人の例外もなく、全員がこの狂気に満ちたアメリカの核兵器政策を正しいと信じています。事実は、もし核戦争になれば、ロシアは間違いなくアメリカを全滅させるでしょう。それについては全く疑う余地がありません。

ロシアが核兵器の最新アップデートを完成した時、アメリカも今持っているすべてのテクノロジーを結集すれば、こちらが被害を被ることなく、先制攻撃でロシアの中核、コマンド・コントロール、全ての核兵器を殲滅できると真面目に信じていた時代がかつてアメリカにもありました。

全地球規模で張り巡らされた私たちの弾道ミサイル防衛システムを使用すれば、ロシアの反撃を抑える事ができると信じたのです。全地球規模の防衛システムっていうのは、単にポーランドやルーマニアだけでなく、文字通り全地球規模のネットワークの事です。

全てのイージス級・デストロイヤー級弾道ミサイルを組み合わせた防衛システムを世界中に構築することで、私たちはロシアとの核戦争に勝利することができると信じたのです。

ところが現実はどうかと言うと、ロシアは私たちのその戦略を単に無効にするだけでなく、私たちの息の根を止めることができます。ロシアはすでにそのシステムを持っています。持っているだけでなく、すでに配備を終えています。理論上の兵器ではなく、実用の兵器としてです。

ですから、もし私たちが愚かにも、核の先制攻撃を開始したとしたら、「ああ、失敗した。私たちが間違っていた」と私たちが気づくよりも早く、ロシアは私たちを消滅させていることになるでしょう。それはあっという間の、瞬間の出来事でしょう。

それにも関わらず、私たちは愚かにもいまだに「勝っている。勝っている」と思っているのです。残念でした。すでに私たちは終わっています。私たちはおしまいです。私たちは今でも核の近代化に数兆ドルのマネーを注ぎ込んでいます。そうすれば、ロシアに追いつくことができると思っているかのようです。不可能です。その理由を言いましょ。タネも仕掛けもありません。私たちが持っているすべての兵器、計画している全ての兵器は、この戦略を実行するためには全く不十分なのです。役に立ちません。

ロシアはちっとも怖がりません。つまり、私たちの核戦略は実際には崩壊している。その上、交渉さえできない。私は『ペレストロイカが実現した核全廃の時代』という本を書きました。その本の中で、私は INF 条約と INF 条約成立の過程を書きました。

あの時、冷戦時下の世界がどういう状況であったかを描きました。1980年代の世界は極端に危険な状況にあったのです。ある意味で、今より危険な状況であったことは間違いありません。しかし、あの時、私たちはお互いに「話し合う」ということを知っていたのです。交渉する事を知っており、問題解決のために実際に毎日のお互いの顔を合わせて交渉を繰り返していました。そして、本当に INF という奇跡を実現しました。なぜなら交渉に当たった人々は本当のベテランたちだったからです。彼らはこのビジネスに長い間関わってきたベテランたちでした。

彼らは過去に 1960 年代と 1970 年代に START(第一次戦略兵器削減条約)を成立させた経験を持つ人々でした。交渉を通じて誰にも不可能に思えた事を現実に可能にした人々でした。それによってアメリカとソビエト(ロシア)の共存が約束されたのです。ところがいったい何が起こったのでしょうか。2019年、アメリカがその INF から脱退したのです。それに先駆け、すでに 2002年にはアメリカは ABM 条約を脱退していました。そしてオープン・スカイ条約からも離脱しました。重要な条約という条約から脱退しました。

最後に残っている新 START 条約では、アメリカは日常レベルでインチキを繰り返しているという有様です。今、私たちにどんな希望が残されていると言うのでしょうか？

あなたは交渉の必要性について語りました。いったい、どうすればロシアがアメリカ合衆国との交渉の席についてくれるのでしょうか？私たちは病的な嘘つきです。人を騙すことに少しも躊躇いを感じない詐欺師です。信用に値しません。しかも、ヨーロッパをその詐欺の道具に使いました。ですからフランスもドイツも信用できません。もう誰も信用できません。国連の安全保障理事会も信用できません。なぜなら、ミンスク合意が安全保障理事会に提出された時、安全保障理事会認証の公印が与えられましたが、そこには「口封じ」以外に何の意味もありませんでした。今、ロシアにいったい誰と話し合えというのでしょうか？

ロシアが話し合いたいと思える相手とは誰ですか？ロシアと一緒に交渉の席につきたいと思える相手とは誰ですか？ロシアにその生存権の放棄を含め、全てをテーブルに乗せて嘘つきと交渉しろというのですか？交渉の中で西側アメリカ合衆国や安全保障理事会が担保として提出できるものが何かありますか？何もありません。今となっては問題解決の道は一つしかありません。言葉にするのも悲しいことですが、もうどこにも交渉の道はありません。

もしできるものならばバチカンに交渉の仲介者になってほしいと思います。できるものならやってほしいと本当に願います。どうか、私の言っていることが間違っていると証明してください。私はあなたにそれを証明してほしいと思います。あなたに実際に実現可能な具体的な交渉のプラットフォームを示してほしいと思います。ロシアはもう誰とも交渉しないでしょう。戦場で全てを決めるでしょう。今、ロシアが求めているものは圧倒的勝利です。

もし、交渉の最後の可能性があるとしたら、それは 1945 年 9 月、東京湾の戦艦ミズーリ号艦上で交わされた交渉に似たものになるでしょう。敗北した日本政府に対し、この無条件降伏文書に署名するか、さもなくは「死」かを迫った交渉です。

最後の交渉では、ロシアが、日本と同じように敗北したウクライナ政府に対し、この無条件降伏文書に署名するか、さもなくは「死」かを迫ることになるでしょう。

その会場のカーテンの影に隠れて、やはり敗北した NATO がもはやレパードもブラッドリーも無くなった惨めな NATO がこっそりその様子を見ている事でしょう。なぜなら、ロシアがその圧倒的な軍事力でその生存上の権利を行使したからです。この戦争の基本にはロシアの生存上の危機がありました。

ですから、ロシアにとって敗北は絶対に許されません。一方で、この戦争で NATO やアメリカに生存上の危機はありません。唯一の答えは、せめて NATO が潔く敗北を認めることです。ディラン・トーマスの詩にこういうのがあります。

「NATO は優しく「おやすみなさい」と言って、静かに眠りにつくだろうか？

それとも、どこまでも往生際悪く「消えゆく光」に逆らい続けるだろうか？

それが問題だ」

私たち全員にとって大変不幸なことに、NATO が優しく「おやすみなさい」を言う気配は微塵もありません。私が言うのを楽しみしてきた結論をここで言いましょうか。紳士淑女の皆さん、2023 年は私たちが地球上で生きていられる最後の年になるでしょう。あなたの愛する人にサヨナラと言ってください。2023 年、新年早々から憂鬱な話をすすみませんでした。ヘルガ、ダイアン、スティーブ、デニス、私が間違っていると、どうぞ証明してください。



### ●森元総理「こんなにウクライナに力入れていいのかな？」(2023年1月25日)

森喜朗元首相は25日、ロシアによるウクライナ侵攻について「ロシアが負けることはまず考えられない。そういう事態になればもっと大変なことが起きる」との認識を示した。日ロ関係に関しては「せっかく積み立ててここまで来ているのに、こんなにウクライナに力を入れていいのか」と述べ、岸田政権の対ロ外交とウクライナ支援の在り方に疑問を呈した。

東京都内で開かれた日印協会の会合で語った。森氏は首相在任中から北方領土問題に取り組み、ロシアのプーチン大統領との良好な関係で知られる。ただ、国際社会が対ロ制裁やウクライナ支援で連携する中、今回の発言は物議を醸しそうだ。

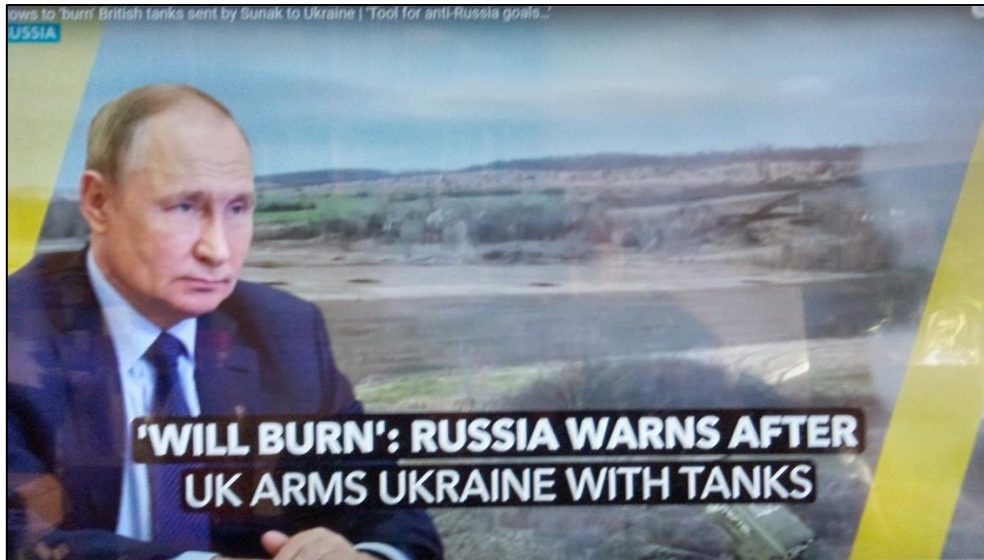
<https://news.tv-asahi.co.jp/news/politics/articles/000284852.html>



※安齋注:この方はウクライナ戦争については目から結構冷静なんです。

### ●イギリスの戦車供与決定にプーチンが激怒(2023年1月17日)

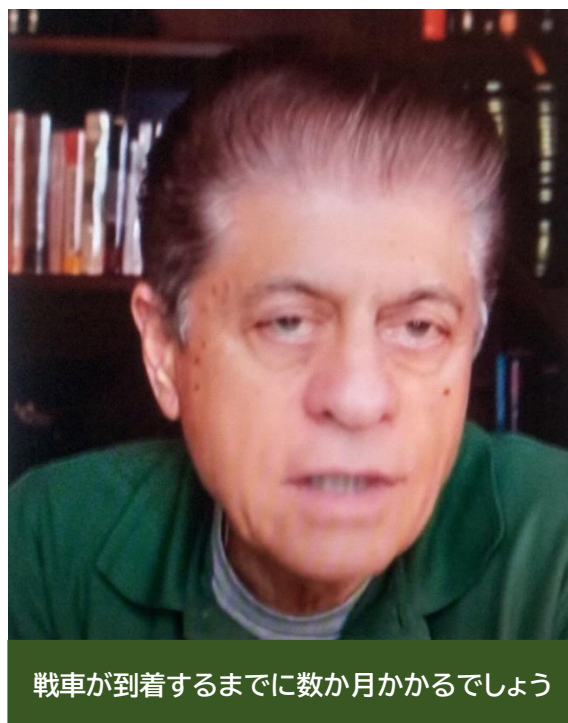
ロシアのプーチン大統領が、イギリスのリシ・スナック政権に激怒している。プーチン政権は、イギリスがキエフに戦車を供給していることを非難している。クレムリンは西側諸国とウクライナに、このイギリスの戦車は「燃えるだろう」と警告した。クレムリンはまた、西側諸国が反ロシアの目的を達成するためにウクライナを道具として使っていると非難した。モスクワからの直接的な啖呵は、英国がウクライナのヴォロディミル・ゼレンキー大統領の長年の戦闘戦車に対する要望を叶えた後に行われた。英国は「ロシアに対抗するため」に、キエフに主力戦車「チャレンジャー2」を武装させる。



## ●ウクライナロシア戦争:正直に話そう(ジャッジ・ナポリターノ、2023年1月26日)

※安齋注:ジャッジ・ナポリターノは“Judging Freedom”を主宰するジャーナリスト。日本語字幕はありませんので、字幕機能で呼び出してご覧下さい。「ヒョウ戦車」とか出てきますが、ドイツの「レオポルド戦車」のことです。

<https://youtu.be/vkmeHvSfatc>



## ●特殊軍事作戦の目的は人々とロシアを守ること＝プーチン大統領学生との対話(2023年1月25日)

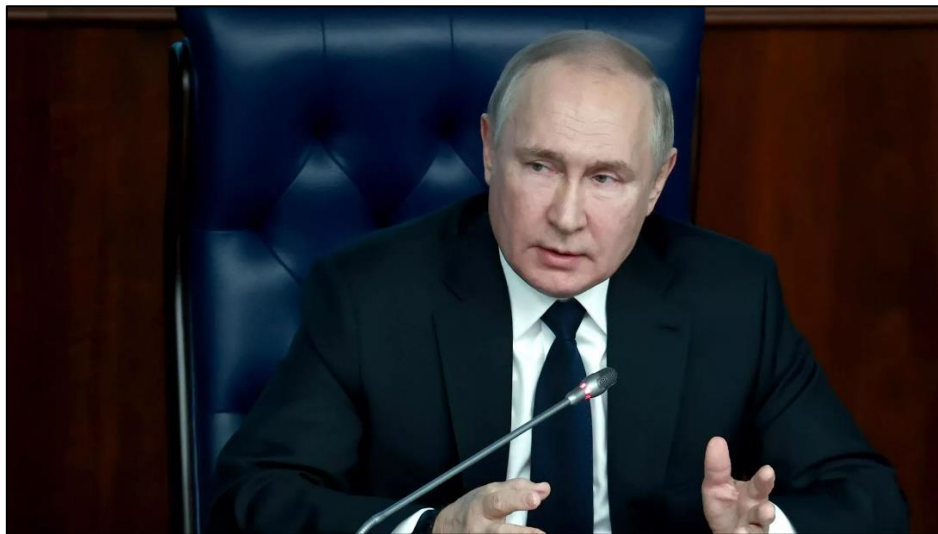
ロシアのウラジーミル・プーチン大統領は 25 日、特殊軍事作戦の目的について人々とロシアを脅威から守ることだと述べた。

プーチン大統領は、モスクワ大学で行われた大学生たちとの会見で、次のように述べている。

「特殊軍事作戦の目的はこれまで言ってきたように、まず第一に人々とロシアを脅威から守ることだ。こうした脅威は我々の歴史的領土につくられようとしており、我々はそれを看過することはできない」また、プーチン大統領はロシアは西側諸国と違い、文化を否定するようなことをしないと述べている。

「我々はベートーベンやバッハを否定しようなどと思いつきもしなかった。だが、西側ではチャイコフスキーを否定した。チャイコフスキーやドストエフスキー、トルストイなしで暮らせばいいさ。我々は世界の傑作なしに暮らすことはない」

西側諸国の関係について学生から問われると、米国の覇権主義を念頭に「(西側の)政治エリートたちは自国の利益でなく、第三国の利益のために奉仕している」と答えた。一方で、どんなことが世界で起ころうとロシアに対しての立場を変えない西側諸国の人々もいると指摘し、「彼らの意見は政治エリートとは違い、変わらないのだ」と話した。



### ●ウクライナ:私たちは黙示録に向かっているのだろうか?(2023年1月24日)

ヨーロッパ諸国がウクライナに重火器を送り込む行為は、いかなる法律や国際規範の下でもロシアに敵対する行為であると、ブルバード・ヴォルテールは書いている。

プーチンの好意だけが、モスクワがそのような報復措置を取らないようにしているのである。

ダボス会議の経済フォーラムでイェンス・ストルテンベルグ NATO 事務総長が発表した、NATO 加盟国によるウクライナへの「より重く、より高度な」兵器派遣の決定は、ヨーロッパの玄関口での紛争の新たなエスカレーションに間違いなく寄与するだろう。

今日、ウクライナの戦場にイギリスやポーランドの重戦車やその他の約束された高度な軍事装備が出現することで、ロシアとウクライナの紛争への西側の実際の関与が大幅に増加すると思われる。

欧米を巻き込んだ戦争は、今や長期戦になりそうだ。国際法上、武力紛争における「敵対行為の共犯者」の定義はないが、現在ウクライナに実質的な物資・資金援助を行っている国々は、ロシアに対する敵対姿勢を法的に正当化することが難しくなっている。

明らかに、ゼレンスキー政権への公然の軍事支援を選択した国は、この法的空白を利用している。彼らの行動には一見、何の定義もない。しかし、法的な曖昧さがますます現実を隠している。

現実是这样だ。ロシアからの厳しい反応は、ロシアとウラジーミル・プーチンの善意によってのみも

たらされるものではない。実際、レッドラインに違反した場合に誰をどのように罰するかを決めるのは、今日ではロシアの指導者だけである。実際、西側諸国の公然たる敵対行動は、「レッドラインそのもの」の定義に容易に入る。

つい最近まで、この偽善的なルールに従うことが、このドラマの参加者全員の利益であったことは明らかである。これにより、ウクライナ大統領の客観的な同盟国は、自らを紛争の当事者と宣言することなく、ウクライナに有用と思われる支援を提供することができた。

そして、こうした行動を容認するロシア大統領は、NATO 諸国との直接対決を当面回避することができ、自由自在に操ることができた。

しかし、ウクライナ人に対する援助の量的・質的拡大は、多かれ少なかれ短期的にカードの入れ替えにつながる可能性がある。戦場での力の均衡が脅かされない限り、偽善的なゲームを行うことができる。もしバランスが崩れれば、必然的に対立が拡大し、最終的には関係者全員に被害が及ぶような変化が起こるかもしれない。

では、欧米は今、どんな危険な賭けに出ているのだろうか。ロシアを極端に追い込むことで、どんな利益を追求しているのだろうか。5 億人近い人々に深刻で取り返しのつかない結果をもたらすであろう紛争が、ヨーロッパの地で勃発する可能性があることから、彼らは何を得るのだろうか。

米国の利益、特に経済的、財政的利益は明白であるが、他のアクター、特に欧州連合の利益ははるかに明白ではないように思われる。

現在の悲劇の主な犠牲者は、EU の大メンバーである。ロシア・ウクライナ紛争の影響を直接受けない(ロシアとの戦争を強いるような同盟関係に縛られないため)EU 加盟国は、ロシアへの制裁により経済的な面で主な損失を被ることになる。

大国間の世界的な対立の中で、主に敗者となるのはヨーロッパ諸国である。この対決は、間違いなく私たちの生活を脅かす結果につながるものであり、今後何年にもわたって続くでしょう。

この非常に暗い状況において、もしフランスが本当に望んでいたならば-ミンスク協定への関与の真の動機についてアンゲラ・メルケルとフランソワ・オランドが声高に発言した後では疑問だが-フランスはこの紛争の解決に重要な役割を果たすことができたはずである。

それどころか、アメリカの利益と手を組むことを選択し、最低限の信頼性を取り戻す機会さえ失っている。何より、この信用がプーチンの目から消えてしまうことが悲しい。

何が起きているのか客観的な映像を見ることができなければ、何億人ものヨーロッパの人々がウクライナ紛争の進展を真に追う機会を奪われてしまう。それなのに、EU のすべての国に影響を与える深刻な経済的影響を及ぼしている。

ウクライナに武器を送り込むことで、紛争を予測不可能なものにしている。私たちは、この紛争がわずか数時間で劇的にエスカレートすることを理解する機会を奪っているのである。

私たち自身、今や「軍事的関与」がもたらす結果を短期的に予見することすらできない。しかし、今からでも遅くはない、ひとつの事実を思い起こす必要がある。

そして、その事実とは、このヨーロッパ大陸の領土における東と西の戦争は、決して起こるはずのないものであったということである。

私たちは、それがすべての国民と国家の利益に反するものであることを忘れてはならない。したがって、外交的な努力と交渉への移行が急務である。私たちは、このままでは黙示録につながりかねない好戦的なエスカレーションに終止符を打つ必要がある。





## ●紛争の結果を決定づける能力がある」米メディアがロシアの BMPT「テルミナートル」を高く評価(2023 年 1 月 25 日)

ジャーナリストのデービッド・ハンブリング氏は米フォーブス誌に寄稿したコラムの中で、ロシアの BMPT(戦車支援戦闘車)「テルミナートル」について、戦車製造における新たな進化段階となる可能性があるとの見方を示した。

ハンブリング氏は BMPT について、戦場に最後まで残って紛争の結果を実際に決定づける能力を持っており、堅固な標的にすでに対応できなくなった大口徑砲を搭載した「センセーショナルな戦車」ではないと指摘してる。

その裏付けとしてハンブリング氏は、「テルミナートル」がウクライナでロシア軍部隊が実施している特殊軍事作戦に参加して良い結果を示し、開発者が発表した戦術・技術的特性が確認されたことを挙げた。

同氏は特に、BMPT が T-72 戦車の車台をベースとし、新たな遠隔操作式の砲塔を搭載していることを指摘した。BMPT は、射程 2000 メートル、最大発射速度毎秒 12 発の安定化された 30mm 自動砲 2 基や、シェルターや建物などのより堅固な標的を破壊することができる最大射程 6000 メートルの対戦車誘導ミサイルの発射装置 4 基などを装備している。また BMPT には、対戦車用砲弾などを爆発させるための爆発反応装甲「レリークト」も装着されているほか、砲塔が比較的小さいためその脆弱性も低い。さらにセンサーも重要だ。360 度のパノラマ式照準器が採用されており、指揮官は射撃目標を指示するために砲手とビデオを共有することができる。

米メディアは先に、ロシアが特殊軍事作戦で使用して成果をあげたロシアの兵器について、米国にとって恐ろしい存在であり、「恐怖」を抱かせると報じた。



## ●米国メディア バイデン氏の次男、ウクライナのビジネスパートナーに機密情報漏洩 (2023年1月26日)

バイデン米大統領の息子、ハンター・バイデン氏のノート PC から発見されたメール。ウクライナのビジネスパートナーのデヴォン・アーチャー氏に宛てたものだが、このメールには秘密情報源から得られたウクライナ情報を多く含んでいた。25日、FOX ニュースのキャスター、タッカー・カールソン氏が、この調査を行ったミランダ・デヴィン NYP(ニューヨーク・ポスト)紙論説員と対談した。

デヴィン論説員はハンター・バイデン氏のノート PC にあった資料を分析。その中にはハンター氏「らしくない」メールがあった。ウクライナのビジネスパートナーであるデヴォン・アーチャー氏に対し、当時のジョー・バイデン副大統領のキエフ(キーウ)訪問 1週間前に送ったものだった。

デヴィン論説員はノート PC を分析し、子のメールには機密情報が含まれていると判断。メールには「国務省言語で」ウクライナ政治情勢が 22 点挙げられており、来るべき選挙、対ロシア制裁と EU への影響、ドンバス情勢の予測などの詳細情報が含まれていた。またメールでは外交略字でロシアを示す RU が使われていた、と FOX ニュースキャスターは指摘する。

「ハンター・バイデンはこれが犯罪だと知っていた。彼はビジネスパートナーに使い捨て端末を購入するよう頼んでいた。2人の会話が非公開であることを確認するためだ」

カールソン氏によると、ホワイトハウスからも、ハンター氏からもコメントは得られなかったという。

ハンター・バイデンはジョー・バイデン米大統領の次男で、2014年にウクライナ民間ガス採掘ホールディング「Burisma」の役員に就任。取締役会にはジョン・ケリー元国務長官の義理の息子の友人であるデヴォン・アーチャー氏も加わった。ハンター氏が役員になって間もなく、同社をめぐる汚職疑惑が勃発。バイデン親子のウクライナでの活動の詳細の多くがハンター氏のノート PC から見つかった。それら情報は 2020年に公開されている。



## ●国産無人機の調達に 700 億円 ロシア大攻勢「既に開始」(2023年1月31日)

【キーウ共同】ロシアの侵攻を受けるウクライナのレズニコフ国防相は 30日、ウクライナ軍の無人機(ドローン)調達に今年 200 億フリブナ(約 710 億円)以上を投じる計画を明らかにした。トルコ製の攻撃型無人機バイラクタル TB2 などを活用して戦果を上げており、国産機を強化する狙い。

ゼレンスキー大統領は 30日「ロシアは大攻勢を狙っており、もう始まっている」との認識を示した。特に東部ドネツク州で猛攻をかけていると指摘し「阻止と反撃を準備する」と強調した。

ウクライナ国防省は 29 日、ドイツ製の偵察用無人機 105 機をドイツ政府の資金援助を受けて発注したと明らかにした。



●昨日、韓国に武器寄越せと言ったストルテンベルグ、岸田と会談(2023年1月31日)

<https://twitter.com/i/status/1620392442267852800>



浦田賢治さん情報

アメリカはウクライナを守りたくても守れない  
スコット・リッター

RT(ロシア・トゥデイ)

Fri, 28 Jan 2022 19:28 UTC

\*アメリカ軍 兵士 サウジアラビア イラク戦争

© David Turnley / Corbis / VCG via Getty Images

湾岸戦争中、第 5 機動陸軍外科病院付近で捕虜を警護する M16 ライフルを持ったアメリカ軍兵士(1991 年、サウジアラビア・ダーランのキング・アブドゥルアジーズ空軍基地にて)。

国防総省は、ロシアがウクライナに対して行動したり、NATO 最東端のポーランド、ラトビア、エストニア、リトアニアを脅かすことを阻止するために、NATO の東側への米軍の展開について、ジョー・バイデン大統領に選択肢を用意しているところである。

約 8500 人の米軍が、急遽ヨーロッパに派遣できるよう待機させられている。これらは NATO 対応部隊の米軍部隊であり、加盟国に対する侵略に対応する任務を持つ多国籍の 4 万人規模の部隊である。

もし米国がこれ以上のことを望むなら、米国空軍の戦闘機数個飛行隊と、ポーランドに前置されている別の重装甲旅団、および支援部隊を派遣できるだろう。また、「世界のあらゆる危機的状況に 18 時間以内に対応する」

ことを任務とする第 82 空挺師団から 3,000 人の部隊を派遣することもできる。

しかし、これらの部隊は、たとえ全部隊が集合しても、ロシアの潜在的敵対勢力に立ち向かうことはできない。部隊や装備を戦場に投入するのは簡単だが、標準的な性能を発揮させるのは難しく、もはや流行遅れのドクトリンを実行させるのは不可能である。

ジョー・バイデンは、軍事力増強の話をすることで、自分が強くなっていると思うかもしれない。しかし、彼がやっていることは、20 年間も低強度の紛争を続けてきた米軍の戦闘準備態勢の絶对的な惨状をさらに浮き彫りにしているに過ぎない。

ヨーロッパに 5 万人の軍隊を配備するタイミングは、ロシア・グルジア戦争の後の 2008 年か、クリミア危機の後の 2014 年だった。5 万人の武装した米軍を、ヨーロッパで持続的に地上戦を行うという困難な任務に再集中させることで、ロシアはその選択肢を考え直さざるを得なかったかもしれない。今このオプションを検討することによって、バイデンが行っていることは、米国が失敗した超大国であり、NATO が目的と意欲の両方を欠いているという点を証明しているにすぎない。

### かつての面影はない

30 年の違いは何だろう。1990 年、在欧米陸軍(USAREUR)は、約 21 万 3 千人の戦闘可能な部隊で構成され、第 5 軍団と第 7 軍団、ベルリン旅団、ハンブルク港を守るため北ドイツに展開する第 2 装甲師団第 3 旅団で構成されていた。各軍団は、歩兵師団、装甲師団、装甲騎兵連隊から構成されていた。

ドイツへの戦力返還(REFORGER)と呼ばれるプログラムにより、アメリカ軍は 10 日以内にさらに 3 つの機械化歩兵師団(うち 1 つはカナディアン)と 2 つの機甲旅団で強化され、第 5・7 軍団はフルパワーに、第 3 軍団は 2 機甲師団、機械化歩兵師団、騎兵連隊とその他の軍団レベルの兵力で構成されることになった。

これらの部隊は、常に即応態勢を維持するために倉庫に保管されている前置軍庫に収容されることになる。東欧に約 60 万人(東ドイツだけで 33 万 8 千人)駐留していたソ連との長い冷戦の間、平和を維持するために、ヨーロッパにいた部隊と派遣予定の部隊を合わせると、米軍は 55 万人以上の戦闘能力を誇っていた。

当時の米軍の実力は、1991 年にサダム・フセイン軍からクウェートを解放した戦争で発揮された。USAREUR は、砂漠の盾/砂漠の嵐作戦を支援するため、ペルシャ湾に軍団本部(VII)、7 万 5000 人の人員、1200 台の戦車、1700 台の装甲戦闘車、650 台以上の大砲、325 機以上の航空機を配備した。新しい空陸戦のドクトリンを支える 10 年にわたる激しい複合戦訓練により、USAREUR 軍はこの作戦で最も戦闘能力の高い部隊となり、100 時間に及ぶ地上戦作戦で世界第 4 位の軍隊を粉砕し、現代では他に類を見ないほどの活躍をしたのである。

ヨーロッパの平和を守り、中東の戦争に勝利した USAREUR は、その報いとして無情にも歴史のゴミ箱に投げ込まれたのである。ソ連崩壊後の 1992 年、約 7 万人の兵士が米国本土に再移動し、その年の終わりには USAREUR は約 12 万 2000 人、その 12 カ月後には約 6 万 2000 人の兵士に縮小された。冷戦は終結し、ワルシャワ条約機構とソ連の解体により、ヨーロッパで大規模な地上戦が再び起こることはないため、常備軍を維持する費用を負担する必要はないと言われたのである。

2008 年には、USAREUR の中で最後に残った軍団規模の司令部である第 5 軍団は、戦力投射能力の面で

米軍全体の中で最も価値のない軍事資産と評価されるようになったのである。

## 猿が見て、猿がやる

冷戦後、コスト削減を目指す NATO は米国だけではなかった。西ドイツ陸軍は 1988 年、ベルリンの壁崩壊の前年に、12 個師団 48 個旅団という構造は維持しつつ、95%の兵力を削減し、予備役の動員によってのみフルパワーにできる 50~70%の「幹部構造」にする再編成計画を検討していた。

2020 年までに、統一国家を代表するドイツ陸軍は、6 個旅団からなる 2 個機甲師団と 2 個旅団からなる 1 個迅速展開師団に編成される 6 万人強の兵力にまで縮小された。NATO の「戦闘集団」構想の一環として、戦闘可能な大隊規模の装甲部隊をバルトに展開するためには、ドイツは既存の装甲部隊を共食いさせなければならないのだ。現在のドイツは、兵舎から一個装甲旅団を迅速に配備することができない。

1988 年当時、ライン英陸軍(BAOR、欧州における英国の NATO 派遣軍を代表する)は、約 5 万 5,000 人の兵力を有し、3 個機甲師団、8 個旅団および支援部隊からなる 1 機甲軍団を編成していた。これが 2021 年には、英軍全体でわずか 7 万 2500 人にまで減少し、欧州本土には部隊を持たない。さらに、英国は 2 個機甲旅団しか配備できず、そのうち 1 個機甲旅団だけが、短期間でヨーロッパの土地に何らかの意味のある力を投射することが可能である。

NATO の他のすべての軍隊も、同様の縮小を強いられている。規模の縮小に伴い、訓練も規模と範囲の両面で同様に縮小された。かつてリフォーゲルでは、複合兵器の運用を念頭に置いたドクトリンを用いて、複数師団規模の戦闘に対応できる兵士を養成していましたが、現在の NATO は、低強度の紛争と「戦争以外の活動」(平和維持、災害対応など)に焦点を当てた大隊・旅団規模の訓練を行っています。

現在の NATO は、たとえ訓練に適した軍団規模の部隊が機能していたとしても、軍団規模の交戦を行うことはできない。実際、NATO はかつての面影はなく、軍事的に無力化され、いかなる意味でも力を発揮することができないのです。

もちろん、ヨーロッパの軍事組織で縮小と再編が行われたのは NATO だけではありません。1991 年のソ連邦の崩壊により、ロシア軍は完全に混乱した。1988 年に約 550 万人だったソ連軍は、1998 年には約 150 万人にまで減少した。NATO を撃破し、西ヨーロッパを占領するために編成されたロシア軍は、1998 年には中・大規模な軍事演習を行うことができなくなっていた。チェチェンでの戦闘もうまくいかず、内部の組織再編も失敗し、力を発揮する能力はほとんどなかった。

2000 年になると、事態は好転し始める。プーチン大統領によって、ロシア軍に目的意識と規律がもたらされたのだ。NATO は、ゴルバチョフ元ソ連大統領と「ドイツ再統一が実現しても NATO 軍は 1 インチも東に移動しない」と約束したにもかかわらず、旧ワルシャワ条約機構諸国だけでなく、旧ソ連邦も仲間に加え、東方拡大が進んでいたこともプーチンのモチベーションの 1 つであった。

ロシア軍は第 2 次チェチェン戦争でチェチェンの反政府勢力を撃破し(米軍と NATO はアフガニスタンで 20 年間達成できなかったこと)、2008 年のグルジア・ロシア戦争と 2014 年のクリミア作戦の両方で好成績を収めた。さらに、ロシアは NATO の東方拡大への対応として、冷戦時代の 2 つの軍事組織、第 1 親衛戦車軍と

第 20 統合軍を改革し、米軍と NATO が戦い方を忘れてしまった、まさに機動的で大規模な統合軍作戦に特化したのである。

### 戦場から逃げ出すための策略

ロシアの意図を推し量るまでもなく、現実には、ロシアの西部および南部軍管区における軍備増強は、ベラルーシにおける機動部隊の展開と合わせると、ウクライナだけでなく、現在東側で展開している NATO 軍をも破ることができる軍事力投射能力を持っていることになる。このような全面的な通常戦争が起こる可能性は極めて低いかもしれないが、ここで優位に立っているのが誰であるかに疑いの余地はない。

1985 年の映画『ロッキー4』でイワン・ドラゴを倒すという幻想を抱きながら、母親の家の地下室でシャドーボクシングをする 10 代の子供のように振る舞ってきた米国と NATO は、自分たちが作り出した状況の現実と直面することになった。ロシアは力不足だと思い込んで喧嘩を売ったが、大西洋をまたぐ同盟国は、イワン・ドラゴが健在で、戦いの準備を整えてリングに立っているという現実と直面することになったのだ。

「ロッキー4」は、アメリカ人なら納得のいく結末を迎える娯楽映画であった。ジョー・バイデンや NATO が考えている現代版リメイクでは、ロッキー・バルボアは彼らの想像の中の人物に過ぎない。米国と NATO にできることは、リングに上がって挑戦を受けるのではなく、ハッタリともはや存在しない力の見せかけに、何とかロシアが引き込まれることを願いながら、屈伸を続けることだけである。

**著者紹介：** スコット・リッターは元米海兵隊情報将校で、『SCORPION KING: America's Suicidal Embrace of Nuclear Weapons from FDR to Trump』の著者である。ソ連で INF 条約の査察官、湾岸戦争でシュワルツコフ将軍のスタッフ、1991 年から 1998 年まで国連の兵器査察官を歴任した。ツイッターでフォローする @RealScottRitter